HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	近世福建漳州地域の陳元光信仰と宗族の形成［全文の要約］
Author(s)	亀岡, 敦子
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12506号
Issue Date	2017-03-23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/65740
Type	doctoral thesis
File Information	Atsuko_Kameoka_summary.pdf



Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

亀岡敦子「近世福建漳州地域の陳元光信仰と宗族の形成」全文の要約

本論文は、近世華南の地域社会の歴史的展開を、閩南すなわち福建南部の漳州地域における陳元光信仰と当該地域に流布する祖先移住伝承である〈陳元光遠征随伴伝承〉、および男系血族集団である宗族との関連において考察したものである。

序章「中国南部の民間信仰に関する研究と陳元光信仰の位置づけ」では、本論文の問題意識、研究課題、対象地域の概要、および各章の主題について論じた。一九八〇年代以降、祠廟や民間信仰について注目した研究が数多く発表されたが、こうした研究は、全国的に流行する関帝・文昌帝君・媽祖（天后）などの神々の祠廟の起源と発展を地域社会と国家との関係の中に位置づけて論じたものが中心であった。しかしながら、地方志を見てみると、全国的な神だけでなく、その地方特有の神（＝〈土神〉）を祀る廟が多数存在する。これらは一定の地域社会に培われてきた地域住民たちの日常生活に密着した形で展開した神々である。従って、ある地方の社会の特徴を解明しようとするとき、その地方特有の民間信仰を分析することは有用な方法であると考えられる。福建には多種多様な〈土神〉が存在する。その中の一つが漳州地域における〈開漳聖王〉＝陳元光である。B・テレ＝ハーレは福建の神々に関する研究の中で、これらの出自に関して、基本的には子孫を持たない〈餓鬼〉（無縁死者）であるのに対して、陳元光は子孫を持つという“例外性”があると指摘した。本論文では、この“例外性”とは何かという問題を出発点として、陳元光信仰と宗族の形成・発展の関連性を、明代後期の漳州社会を中心として、唐代から清代前期までの時間軸の中に位置づけて論じる。

第一章「福建漳州地域における陳元光信仰――宋代から明代まで――」では、漳州地域の歴史の中で、陳元光が如何にして地域の守護神としての地位と、〈祖先〉としての「身分」を獲得したのかという問題を考察した。陳元光は北宋頃には霊験が顕著な〈鬼〉として存在したが、朝廷の賜額・賜号政策のもとで正当な〈神〉として承認された。また南宋には漳州を創始・開拓し賊と戦って死んだという伝承の存在が確認でき、地方官や在地の儒学者はそれを認めた。陳元光は漳州の守護神としての地位を得たのである。明代初期、陳元光は陳氏一族の族譜の中に祖先として登場する。明末になると、漳州地域の陳氏一族は陳元光の子孫にあたるという認識が一般的に浸透した。陳氏一族は族譜に陳元光らの事蹟を伝え、地方志の編纂者はそうした族譜の記事を積極的に採録した。明代後期以降は陳元光の生前の業績が内容的に増補されていく。こうして陳元光は〈神〉と〈祖先〉の身分を兼ねるようになったが、その背景には当該地域における宗族形成と族譜の普及があったことが窺える。

第二章「陳元光遠征随伴伝承の成立と展開」では、陳元光の〈神〉でもあり、〈祖先〉でもあるという性質の根底に存在する〈陳元光遠征随伴伝承〉が如何にして成立したのかを考察した。広東と福建の境界地域において、陳元光が「蛮族」を制圧したという伝承が宋代までには流布していた。この伝承は、明代以降に編纂された各地の地方志に採録されたが、時代が下ると、これに様々な記録媒体の情報が融合することで、現在伝えられる形に近づいて

いく。また、漳州地域の陳姓宗族の間には陳元光遠征随伴伝承が族譜内に文字化して流布していた。これは明末ごろから地方志に積極的に採録されるようになり、清代の康熙『漳州府志』で当該伝承のひな形が完成する。地方志への採録はその地方の「正統な歴史」としてお墨付きを得たことを意味し、ある種の権威を有するものである。陳氏の族譜および地方志の中に書き込まれた祖先移住伝承は、周囲の後発的宗族によって、自らの社会的地位を高めるために、宗族形成・族譜編纂の過程で附会されたのである。

第三章「明代の福建漳州府における宗族の形成――龍渓県の白石丁氏をめぐって――」は、龍渓県白石丁氏一族を取り上げ、明代中期における祠堂建設の記録が宗族にとって如何なる意味があったのかを考察したものである。白石丁氏にとって、祠堂の建設は、郷賢房と貢元房の統合を象徴するものであった。両派の統合後、彼らの祖先である丁知微・知幾の業績に関する言説が形成された。丁氏は宗族としての活動と地域社会への貢献を族譜に詳細に記録し、地域社会における指導力を正当化し、唐宋時代の祖先の事績はそれを補強する役割を果たした。彼らは始祖である九承事郎の来歴を〈陳元光遠征随伴伝承〉に附会したが、入閩時期を陳元光らよりもより早く設定した。始祖承事郎と郷賢丁知幾という二人の祖先は、明末清初の混乱期に一族の中心であった貢元房にとって、一族の団結と復興を主導し、その威信を地域社会に示す上できわめて重要な存在であったために、族譜に詳細に記録されたのである。

第四章「陳元光信仰と九龍江デルタ社会」は、九龍江河口地域に存在する陳元光関連祠廟を中心としてとりあげ、陳元光とその部将の信仰の起源とそれが九龍江デルタ社会で如何なる展開を見せ、如何なる歴史的背景があるのかを考察したものである。漳州の宗族は、自らと同姓の武神を祖先と位置づけ、さらにその神々を陳元光とともに漳州を平定した部将であるとした。これらの神々が陳元光信仰の体系に組み込まれた時期は、早くても明代後期か、清初の遷界令発布後、宗族組織および祭祀組織によって維持されていた社会秩序が崩壊して、その再建の機運が高まった乾隆～嘉慶年間であった可能性が指摘できる。漳州の宗族集団は、神々の体系においても陳元光を利用し、混乱を乗り越えて成功しようとしたと考えられる。最後に、「開漳聖王」は何時誕生したのか。これは、遷界令発布後、乾隆年間（一七三六～一七九五）以後に生まれた名称であり、同時期に台湾に渡った漳州人によってもこの呼称が使われ、台湾で一般にこの呼称が用いられるようになったのである。

終章「陳元光の伝承と信仰からみた閩南地域社会と今後の展望」では、各章の内容をまとめた上で、陳元光信仰をめぐって描き出される漳州という一地方の社会背景を歴史的な時間軸に沿って描き出すとともに、華南社会研究の今後について展望を述べた。〈陳元光遠征随伴伝承〉の舞台は福建と広東の交界地域にまで広がり、「諸蛮」やその居住地域である「峒」などが登場する。これには、唐代に漢族の移住と入植が始まり、元来は非漢族の居住地域であった開発前線地帯としての福建における漢族と非漢族との接触が反映されていることが窺える。これら非漢族の動向に対して考察を加えることは今後の課題である。また、漳州沿海部地域社会の宗族と神々の秩序に大きな変化をもたらした遷界令をはじめとする清初の

混乱の実態を解明することも、今後の課題である。